

研修資料 3 子供との面談テクニック・子供への話しかけ方テクニック

1 いじめ被害児童生徒への話しかけ方

《「いじめ」という言葉を使わずに、いじめの被害を早期発見するポイントと具体的な声のかけ方》

アプローチする

ポイント

- 顔色が悪い、授業中に発言しなくなったなど、客観的に「○○のように見えるよ」とアプローチをする。
- 本人が「はい・いいえ」で返答できる声かけにする。また、「できていない」ことでも、その理由（内面）にふれずに、「いいえ」と返答できる声かけからスタートする。

具体的な声かけ

- 「最近、元気がないように見えるよ」
- 「最近、笑顔が少なくなったような気がするなあ」
- 「食欲はある？」
- 「夜はよく眠れている？」
- 「お腹が痛いとか、頭が痛いとかはない？」 など

このアプローチに

応じる場合

37ページへ

応じない場合

38ページへ

応じる場合

ポイント

- 「悩んでいるのか」と聞くと、いじめ被害を隠そうとする場合がある。
- 本人にとって答えやすく抵抗の少ない言葉を使う。

具体的な声かけ

- 「何かちょっとでも困っていること、どうしていいか分からないことはあるかな？」
- 「そうか。そのことについて、誰かに話せている？」
など

いじめの被害の内容を聞き出す

ポイント

- いじめられていることは、本人にとって認めたくないこと。そのことを理解する。
- 答えを選択式にする→言葉にするのが難しい子供でも話しやすくなる。
- 本人の気持ちを吐き出させてあげる。
- 今後の対応について相談する。答えられない場合を考え、3パターン以上の準備をしておくとうい。

【例】「謝ってほしい」、「もうしないでほしい」、「関わってほしくない」など

具体的な声かけ

- 「困っていることは、①家のこと、②勉強のこと、③クラスの間関係のこと、のどれ？」
- 「人間関係で困っているの？それは、①クラス、②別のクラス、③部活、のどれだろう？」
- 「誰のことが言いたくなかったら、言わなくていいよ。仮にその人のことAさんとしよう。Aさんから嫌なことを言われたりしたのかな？」
- 「そのとき、どんな気持ちだったの？嫌だった？腹が立った？」
- 「Aさんに、この後どうしてほしい？」など

応じない場合

ポイント

- 子供によって、話しやすい相手は異なる。
- 担任に話しづらいようならば、他の話しやすい人へ橋渡しする。
- 学校の他にも相談機関があることを教える。

具体的な声かけ

- 「先生に話しづらかったら、スクールカウンセラーの先生もいるよ。保健室の先生も相談にのってくれるよ」
- 「学校で話しにくかったら、相談電話等、学校の他にも話を聞いてくれるところがあるよ」 など

重要ポイント

「秘密にするから」、「内緒にするから」などのできない約束はせず、「あなたを守ってくれる大人に伝えることは大切なこと」であることを理解させる。

2 いじめ加害児童生徒への話しかけ方

《いじめをどう認めさせるか。いじめはいけないことであることをどうやって理解させるか。》

① 感情の共感

ここでのポイント

先生は、あなたのことを承認していることを感じさせる「空気づくり」を大切に、加害者にとって最も話しやすい教員がアプローチする。

具体的な声かけ

「最近、何となく嫌だなと思っていることはないかな？」

「何かイライラすることはないかな？」など

加害者の反応

「実は、むかつくことがあって…。あいつが、俺に●●●したんだ！」

ここでのポイント

加害者の嫌だった気持ちに寄り添い、その気持ちを共有（共感）することで、反省しやすくなる。

具体的な声かけ

「あなたも、つらかったんだね。」

「我慢していたんだね。」 など

重要ポイント

加害者は、何らかの「困り感」などがきっかけでいじめ行為にいたっている。

ここでのポイント

被害者の立場に立って考えさせ、加害者が自分の気持ちだけで行動していることに気付かせるとともに、いじめ行為は許されないことを教える。

具体的な声かけ

「(被害者に)は、あなたのそういう気持ちを言ったのかな?」

「(被害者に)は、あなたの気持ちを知っているのかな?」など

加害者の反応

「言っていない。」

「言わなくてもわかるやる?」

ここでのポイント

加害者が納得することが重要であり、加害者が納得したら、「▲▲▲したこと、やり過ぎだったな」などの気付きが起こる。

具体的な声かけ

「それは、(被害者に)言わないとわからないよ!」

「あなただって、急に理由が分からないまま、●●●されたら、意味が分からないよね?」
など

加害者の反応

「まあ、そうだな。ちょっとやり過ぎたかな。」

重要ポイント

加害者の **感情** と **行為** を分けて考える。

感情は否定せずに共感し、いじめ行為のみを指導する。

(感情と行為をセットにして指導すると、心を閉ざしたり、反発したりする傾向がある。)

ここでのポイント

アサーション（自己主張）スキルを身に付けるようアドバイスする。

相手に「嫌なことだから、やめてほしい」と自分の口で伝えることの大切さを教える。それができなさそうなら、教師が仲介人となり嫌な気持ちであることを伝える。

具体的な声かけ

「もし、再び被害者が●●●してきたら、今度はどうする？」
具体策の選択肢を示し、加害者にどう対応するかを自分で決めさせる。

(例)

- ・「それは嫌だから、やめてほしい」と自分の口で伝える。
- ・その場から離れ、距離をとる行動をとる。
- ・教師に報告し、教師が介入してやめてほしいと言ってもらう。
など

ここでのポイント

リラックススキルを身に付けるようアドバイスする。

嫌な気持ちになったときの対処方法をアドバイスする。

具体的な声かけ

「もしまた、むかつくようなことがあったらどうする？」
ストレス解消スキルを教える。

(例)

- ・家族や大人に自分の気持ちを聞いてもらう。
- ・好きなことに熱中する。
- ・①拳を5秒間握る。
②パッと手のひらを解放する。
など

重要ポイント

加害者が被害者に対して再び嫌な感情を抱いてしまった場合、どうすればよいかを教える。

3 見つけにくいいじめ被害の早期発見ポイント

見つけにくいいじめの被害者の発見チェック例

気になる児童生徒について、チェック を入れてみてください。

- 忘れ物が増える。
- 成績が下がる。
- 体育の見学が増える。
- 調理実習に参加しない。
- 授業や活動の参加度が低い。
- 授業中に指名しても答えない。
- グループで、自分の意見を言わない。
- 作文、工作等の展示物を仕上げない。
- 部活でやる気が見られない。 など

上記のような態度をとる、いじめ被害者の心情

- 授業中に当てられることや、自分の作品を展示されることは、周囲から注目され、陰で笑われる。
- 学校が面白くないから、積極的になれない。
- そんな態度をとっているのは、決してラクをしたいからではない。

発見チェック例の態度を、一つだけで見ると、いずれも積極性が乏しいため、「要指導」の態度に見えますが、「要支援」かもしれない。



発見チェック例に該当する態度が他の授業や活動でも見受けられるか、周囲の先生たちに様子を見てもらい、情報共有を！

(例)「国語の授業はどう？」

「休み時間の様子は？」

「部活動ではどんな感じ？」



情報共有の結果、「要指導」の態度が多く見受けられるようだったら、いじめに遭っているかもしれません。

重要ポイント

- 「要指導」に見える態度は、「要支援」のサインかも！
- 声かけのアプローチは、「ちゃんとやりなさい」ではなく、「最近、どうかした？」